

平田俊子さんの詩集

「第12回萩原朔太郎賞」が

平田さんの プロフィール

昭和三十年、島根県生まれ。立命館大卒業。詩集に『ラッキョウの恩返し』『夜ごとふとる女』『(お)もろい夫婦』『ターミナル』『手紙』『のち雨』『現代詩文庫・平田俊子詩集(いずれも思潮社刊)』『アトランティスは水くさい!』『(書肆山田)』がある。数年前から小説や戯曲も手掛け、小説集には『ピアノ・サンド』『講談社』、戯曲集には『開運ラジオ』『毎日新聞社』がある。他にエッセー集『きのうの雲(平凡社)』など。第一回現代詩新人賞、第三十九回晩翠賞受賞。今年八月、高村光太郎の『智恵子抄』をもとにした戯曲『れもん』を脱稿し、十二月に東京と京都で上演の予定。出演は石田えりさん、柄本明さん、演出は佐藤信さん。

受賞を聞いて

戸惑いの気持ちも

詩壇の賞には縁がなく、今回もあまり期待していませんでした。朔太郎賞は第一回もノミネートされましたが、谷川俊太郎さんが受賞。それだけに、このたびは戸惑いと同時に身の引き締まる思いです。

『詩七日』とは毎月七日を



詩集『詩七日』

「詩を書く日」と決めて、二年間にわたって書きためた作品をつづった詩集です。デビュー以来わたしの作品についていわれてきた「これは詩なのか」という意味も含めました。毎月七日にあつたこと、思ったこと、想像したことを自分なりの方法で紡ぎました。詩は悪い夢を見るように浮かんできますが、これからも、悪夢を見続けたいと思っています。

10月31日に

贈呈式や記念講演

第十二回萩原朔太郎賞の贈呈式と受賞者の記念講演などの催しが、前橋文学館で行われます。日時：10月31日 午後1時30分 会場：前橋文学館 対象：一般 先着百三十人 内容：選考経過の説明や賞の贈呈、平田俊子さんの記念講演など 申し込み：10月27日 までに生涯学習課 890-5825へ

年を取った人の話は長い

この世にしがみつくようにマイクの前を離れない

谷川さんのスピーチは明るく楽しく簡潔だった

谷川さんはきつとまだ

年寄りになつてはいないのだろう

いつか会いたいと思つていた人が先月死んだ

といつて特に会いたくない人が

永遠に生きているわけではない

自分は死なない気がするといつていた

宇野千代という人も亡くなった

谷川俊太郎も多分いつかは。

たくさん追悼文が書かれるだろう

こそつて腕をふるつだろう

一番読みたいのは

谷川さん自身が書いた

明るく楽しく簡潔な追悼文

あと七分できょうも終わる

いいこともなく悪いこともなく

好きでも嫌いでもない一日

きょうも

きのうも

おととも。

きょうもきのうもおととも。

谷川俊太郎が片付かないまま

日曜が終わわり月曜になる

(詩集『詩七日』(思潮社)から)